

『「治療的乗馬」研究集会2007』開催される

障害をもつ人に乗馬をはじめとした体験活動を実践する人や、この分野を研究している、関心をもつ人が一堂に会して、活動報告や意見交換を行い、「治療的乗馬」といわれるこの領域の質的向上をめざす『「治療的乗馬」研究集会2007』が、平成19年11月10・11日の2日間、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）において行われた。

この集会は『日本治療的乗馬研究会』が主管しており、2005年にドイツから治療的乗馬の権威であり元国際障害者乗馬連盟会長のカールクルーバー博士を招いて行われたセミナーの実行メンバーらが中心となって行っているもので、今年で2回目となる。

全国から集まった参加者は各地での実践者の他に、大学教授、医師、理学療法士、教員、学生といった幅広いものとなり、50余名が参加した。

内容は、医療の最先端で活躍される2名からの記念講演が中心となり、初日は柳迫康夫氏（東京都心身障害児総合医療療育センター整肢療護園園長）より、「脳性麻痺における体幹コントロール～股関節を中心に～」と題して、「体幹」の形成や脳性麻痺の定義や原因等について、またその治療法についての解説が行なわれた。さらに乗馬の動きが体幹にもたらす作用についてもふれられ、脳性麻痺児へ現実的アプローチが述べられた。

2日目は田中朱美氏（東京女子医科大学附属女性生涯健康センター顧問）より、「『うつ病』の状態像とその治療的評価」という題で、病気の解説と発症メカニズム、診断及び治療法を分かりやすく説明された。また「うつ病」の治療経過と評価法において、精神疾患への治療的乗馬の評価を導く糸口も示唆された。

実践報告は、これら2つの講演に関連させながら、RDA 宇都宮、NPO ゆきわりそう、社会福祉法人わらしべ会、障害者乗馬レモンクラブにおける実践事例の他に、公立小学校におけるポニー飼育、イギリスでの実践事例、馬の衛生管理、日本在来馬の適用可能性について8名より発表が行なわれた。日程の最後は、研究会代表を務める滝坂信一氏（東京農業大学）と小川家資氏（帝京科学大学）の2名が座長となって総括協議を行ない、発表者と参加者らの質疑応答を経て、次回集会での再会を約束して締めくくられた。

なお、この研究集会の準備と平行して、治療的乗馬の実践や研究を安定的に実施し、わが国における健全な発達と社会への普及を目的とする特定非営利法人の設立作業が研究会メンバーで進められ、「日本治療的乗馬協会」として平成19年3月に認証された。今後はこの研究集会の主催、ニューズレターの発行、ホームページの作成といった多様な活動を通じてこの分野に興味を持つ多くの人々が参加できる広場となることが願われる。



柳迫氏の記念講演の様子



1日目夜の懇親会にて



参加者との記念撮影